

ヒロバ.:キョウフ



雪

出会い

出会い

この日のために新調した紺色のスーツ。朝から時間をかけて作ったヘアスタイル。散り始めた桜の花びらが舞う中、僕、速水翔（はやみかける）は念願の大学生になった。第一希望の大学は見事に落ちてしまい、何とか滑り込んだのは三流どころの誰も知らない超マイナー大学。まあ、それでもとりあえず大学生だ。

とりあえず大学生になっての大目標は彼女を作ること。高校までずっと男子校だったから、彼女というものができたことは今まで一度もない。いや、もちろん僕だって人並みにそれらしきものはあったことはあったけど、人に堂々と話せるほどの経験はないという意味だ（?）。

やっとやっと勉強から解放されたんだ。あとはサークルに入って、かわいい彼女を作って、就職するまでに悔いのないよう、思い切り大学生活を楽しもう。

学長の長ったらしい祝辞を聞き流しながら、僕はほほを上気させていた。

入学式から数日が過ぎ、男の友達は何人かできた。が、肝心の彼女はまだできない。その影さえない。

北海道の田舎から上京してきた僕にとって、大学のキャンパスにいる女の子達は何だかキレイすぎて近付きがたいのだ。みんなモデルみたいに見える。

それにいざ大学生活が始まってみると、これが結構忙しい。自宅通学のやつらと違って、こっちは貧乏学生なので、バイトもかけもちしなくてはならない。

うちの親父はただのしががないサラリーマン。いまだに実家は借家住まいだ。その親父にバカ高い大学の授業料を払ってもらっているだけでも申しわけなくて、もっと仕送りを増やしてくれなどとは口がさけても言えない。

バイトの合間に講義に出て、またバイトに行って――毎日があつという間だ。

はっきりいってサークル活動やコンパどころではない。現実は厳しい。

考えていたような優雅な大学生活は僕には夢のまた夢だ。

乗り込んだバスは少し混み合っていた。最近になってようやくバスの乗り方にも慣れてきた。東京に出てきて最初の頃は、何度乗り間違えて時間をロスしたかわからない。やっとの思いでバスに乗っても、無事目的地に着くまでは気が休まらなかった。

それが今、僕はつり革につかまりながらヘッドホンで音楽を聞いている。どうだ、この余裕は。

大きな交差点の信号でバスが停車した。ここの赤信号はいつも長いんだ。僕はひたすら音楽を聴き続けていた。その時だ。

「ここで降ります。止めて下さい！」

前のほうで女性の声がした。思わず視線を向けると、運転手のそばで女の子が騒いでいる。僕と同じくらい——いや、高校生……うーん。一つか二つ年上かも。女の子の年はよくわからない。

「早く止めてください！」

「止めてって言われてもねえ。バス停じゃないところでは無理ですよ」

運転手が困惑したように言う。

「止めて、止めて！！」

びっくりした。その子が絶叫したのだ。当然のことながら、バス中の視線がその子と運転手に降り注ぐ。

「止めて！」

「わかりました。今回だけですよ」

その声に気おされるように、運転手が渋々ドアを開ける。

女の子は、まるで誰かに追われているのかと思うほどの素早さでバスを降りていった。

すぐにバスが動き出し、道端に立ち尽くしているその子の横顔が窓ガラスに流れていく。

——何だったんだ？今のは。ずいぶん変わった子だな。

それが彼女、愛咲（あさき）に会った、僕の第一印象だった。

始まり

始まり

二度目に愛咲に会ったのもバスの中だった。

珍しくバスは空いていて、僕は一番後ろの席に座っていた。ガキの頃からなぜだかこの一段高い後部座席が好きだ。よく遠足でこの特等席を取り合ったものだ。まあ、普通の男子なら皆覚えがあることだろう。

ふと前を見ると、運転席の近くに女の子が立っている。

こんなに空いているのに立っているなんて珍しいな。アレ、待てよ。どこかで見たことが……。あ、あの子だ！この前バスの中で「止めて下さい」とか絶叫してたヤツ……。よく見ると何だか蒼い顔をしている。もしかしたらどこか具合が悪いのかもしれない。この前バスを途中で降りたのも体調が悪かったんだ。きっと。

「すいません、止めて下さい！」

僕はとっさにそう叫んでいた。

「止めて下さい！」

席を立て、彼女のそばに行く。彼女がびっくりしたように僕を見る。

「お願いします。止めて下さい！」

運転手はあわててブレーキをかけた。

「何ですか。困りますよ。お客さん」

「すいません」

僕は彼女の手をつかんでバスを降りた。

僕たちを道に残したまま、怒ったようにバスは走り去っていく。

「あの……」

「あっ、ごめん」

僕は慌てて彼女の手を離した。

「ごめんね。でも君、前にも途中でバス降りたことあったでしょ。実はあの時、僕たまたま乗り合わせただけだ。何だかまた降りたそうだったから」

「……」

彼女は何も言わなかった。

「ごめん。見間違いだった？」

そう言うと、彼女は慌てたように首を横に振った。

「いえ、その通りです。すみません」

「具合でも悪かったの？大丈夫？」

「ううん、コンビニに寄りたかったの」

「は？コンビニ？」

「はい」

彼女は少し先にあるコンビニを指差して笑った。

「もう喉かわいちゃって。次のバス停からだ歩くの面倒なんだもん」

何てヤツだ。そこのコンビニに入りたいからバスを止めたのか？いや、実際に止めたのは僕か。それ

にしても……。僕はあきれて声も出なかった。

「じゃあ、この前も？」

「あの時は生理現象。どうしてもトイレに行きたくって。ごめんなさい」

彼女はそう言ってまたニコッと笑ってみせた。

——かわいい。結構この子、かわいいじゃん。

僕は、まるで異性に目覚め始めた中学生みたいに、胸がドキンとなるのを感じた。

そうだ。お茶に誘ってみようか。ま、だめならだめでいいしな。これも練習だ。

「あのさ、今から時間ある？よかったらその辺でお茶でも飲まない？」

よし言えた。僕は心の中で小さくガッツポーズをした。

「はい」

彼女は笑ったままうなずいた。

——う、うそだろ。いいのかよ。僕は内心の動揺を隠して、

「よかった。実は次のバイトまで時間が余っちゃってさ」

なんて言ってみる。

「私もそんなところです」

やった！もう一度今度は思い切りガッツポーズ。もちろん心の中で。

僕たちは近くのスタバに入った。外が見える席に並んで座り、熱いカフェラテをすする。

「ふうん、かけるくん、っていうんだ。いい名前」

「かけるでいいよ。君は？」

「あさき。嶋原愛咲」

「大学生？」

「うん、一応。通信だけどね。だから昼間はずっとバイトしてる」

へえ。通信大学生か。やっぱり少し変わってるな。でもこうして話してみると、思ったよりずっと明るいし、気さくない子だ。僕は愛咲が気に入った。

「また連絡していい？」

「いいよ」

僕たちはお互いの携帯番号とアドレスを教えあった。

こうして僕と愛咲の恋愛が始まった。季節はもう初夏になっていた。

初めての夜

初めての夜

僕はすぐ愛咲に夢中になった。

バイトや大学に加え、愛咲とのデート、と生活はますます忙しくなったけれど、何とか時間をひねり出して愛咲と会うことが楽しかった。

何といっても、これでやっと人並みに彼女ができたんだ。

スタバでカフェラテを飲みながら、評判のラーメン屋で中華そばをすすりながら、時には安い居酒屋でビールを飲みながら、僕らは二人でいろんなことを話した。そんな時間を重ねていくうちに、僕は愛咲のことを少しづつ知っていった。

年齢は僕より一つ年上の十九才。都内の通信大学に籍を置く大学生。何でも高三の時に通信制の高校に編入し、そのまま通信大学に進んだらしい。

正直「ちょっと変わった経歴だな」と思った。が、その辺は愛咲があまりくわしく話したくないような感じだったので、僕もあえてそれ以上は聞かなかった。

まあ言いたくないことの一つや二つ、誰にだってあるよな。僕だって「どこの大学に行ってるの？」って聞かれて、この大学の名前を言うのはあまり気が進まないもんな。

とにかく、愛咲とこのままずっと時間を過ごせることができたなら――僕はそれだけでよかった。

「ねえ、カケル、将来の夢ってある？」

いつものように週末の午後、二人で遅めのランチを食べている時に愛咲が言った。

「夢？」

「うん。将来何になりたいとか、こうしたいとかさ」

「夢ねえ……。まあ、昔はそれなりにあったけどな」

僕は運ばれてきたポークカツレツを切り分けながら言った。少し肉が硬いな。

「なにになに？」

「いや。いいよ。かなりベタでハズイから」

「いいじゃない。夢を見るのは自由なんだもん。何になりたいかったの？」

「うーん、サッカー選手？一応高校までサッカー一部だったからね」

「すごいじゃない」

別にすごくはない。中学からずっと万年補欠だったんだから。とりあえずそのことは黙っておこう。

「ま、今の夢？というか希望は、しいていえば四年後無事にどこかの会社に就職することかな。なんか夢も希望もないこと言ってるね、俺」

「そんなことないよ。夢なんてどんどん変わっていくのが普通だもん」

愛咲は、ほほにかかる髪の毛を左手で押さえながらサラダのレタスを口に運んだ。そのしぐさはいつも僕の中のどこかを刺激する。

「愛咲は？何かあるの？将来の夢」

「私はね、教師」

「教師——」

「うん。中学校の先生になりたいの。今の学校、教員免許が取れる大学だから。でも教職は今超狭き門だからねえ。どうなるかはわからない。ほんとに夢」

「愛咲なら大丈夫だよ」

「ふふ。ありがとね。カケルにそういわれると頑張れそう」

愛咲は目を細めて笑った。

僕はちょっと感動していた。僕と違ってちゃんと将来のことを考えている。しっかりした子なんだな。こっちはほんと、何とか就職できればいいという程度だもんな。

「応援するよ」

僕は本気でそう思った。

そんな週末を幾度か繰り返した、ある日の夜。僕はひそかにある決心をしていた。
もう初めてのキスもすませた。翌日の日曜は二人とも休み。レンタルビデオ店に勤める僕と、ファーストフード店で働く愛咲。お互いバイト先がサービス業のため、日曜に休日が重なることはめったにない。バイトとはいえ、僕も愛咲もがっちりシフトに組み込まれているので、休みを合わせるのはなかなか難しいのだ。

そんなわけで今日はかなり貴重な夜だった。今日しかない。この日を逃したらもう後がない。自分でもめちゃくちゃ気合が入っているのがわかる。

いつものようにバイトの引けたあと待ち合わせをして、ちょっと小洒落た店で食事をして、軽く飲む。いつもならここでそれぞれの駅に別れるところだが、

「今から俺の部屋に来ない？」

僕は思い切ってそう切り出した。本当ならきれいなホテルにでも・・・といきたいところだけど、なにぶんこちらは貧乏学生。金がないので仕方がない。

「どうする？」

わざと軽い感じで聞いてみる。

「どうしようかな」

そう言う愛咲の目に迷いが無いのを僕は感じ取った。

「よし、行こう」

そのまま愛咲の手をつかんでタクシーに乗り込む。車内でも僕たちはずっと手をつないだままだ。

この特別な夜。窓の外を過ぎていく、東京タワーのイルミネーションが僕たちのFirst Nightをお祝いしてくれているかのように、にじみながら光っていた。

僕のアパートに着いた。家賃六万五千元。築十三年。何の変哲もない一Kの部屋。
玄関を入るとすぐに部屋全体が見渡せる。そんな造りだ。

「入っていいよ」

「おじゃまします」

すごい、初めて愛咲が僕の部屋に来た。このために、誰かの歌じゃないけど、昨日一晩かけて掃除したのだ。男の部屋はちょっとくらい散らかっているほうが女の子に受けがいいとか何とか、何かに書いてあったけど、それにしても限度というものがあるだろうしな。前はちょっとその限界を超えていた。

「へえ、結構キレイにしてるんだ」

愛咲は、僕のことをどこまで見通しているのかわからないようなセリフを口にする。

「その辺に座ってて」

愛咲のために普段自分では飲まない紅茶のパックも買っておいた。それを飲みながら二人でたわいもない話をする。

僕は必死で、はやる気持ちをおさえていた。ふと会話が止まり、沈黙が走る。ベッドにもたれながら愛咲が小さくあくびをした。

だめだ。もう僕も限界だ。

「そ、そろそろ寝ようか」

「うん。眠くなっちゃったね」

愛咲が素直にこっくりとする。

僕は、もちろんというべきか、一応というべきか、女性とのことはこれが初めてではない。高二の時に初体験は済ませている。それは確かだ。でもそれほどたくさん経験があるわけでもない。これも確かだった。それに何よりこういうことは僕の人生でずいぶんと久しぶりだったのだ。

僕は部屋の電気を消した。カーテンのすき間から外の明かりが室内に漏れてくる。僕たちはもつれ合うようにしながら二人でベッドにもぐりこんだ。

あ、愛咲も初めてじゃないんだな。歓喜の波の中を泳ぎながら、なぜか僕はふとそんなことを思った。

でもそれは全く問題ではない。今この瞬間、僕の腕の中にいる愛咲が僕は好きなのだから。

愛咲。愛咲。大好きだよ。愛咲の一番柔らかい場所に進みながら、彼女の体を強く抱きしめる。愛咲。

愛咲。耳元で何度も名前を呼ぶ。

「カケル・・・私・・・」

愛咲が切ない声で絶頂に近いことを知らせる言葉をつぶやく。ああ、愛咲。僕ももう・・・。思わずバラの花びらに似た唇をふさぐ。激しい高波が来た。愛咲の身体が少し痙攣したみたいに振動する。僕はいつのまにか果てていた。

告白

告白

余韻がとうに引いてしまっても、僕たちは互いの身体をからめたまま抱き合っていた。どのくらいそうしていただろう。

「ねえ、カケル」

僕の腕の中で愛咲が身体の向きを変えながら言った。

「聞いて欲しいことがあるの」

僕は「なに？」と答える代わりに愛咲を抱く腕に力をこめた。

「私ね。病気なの」

「ええ？」

何だって？僕は思わず飛び起きそうになった。一気にたたき起こされた気分だ。

何だよ、それ。冗談じゃないぞ。一瞬、最悪のことが僕の頭をよぎる。病気って一体何の病気だよ。

「やだ、カケル。なんか変な病気だと思ったでしょ」

また見透かされた？

「い、いや・・・」

僕は優柔不断の子供みたいに口ごもる。

「広場恐怖——ってわかる？」

「？」

僕は暗闇のなかで小さく首を振る。初めて聞く言葉だった。広場恐怖・・・？

「たとえば・・・なんて言えばいいかな。閉じ込められる感覚が苦手なの。ううん、苦手なんてもんじゃない。もう恐怖」

愛咲の説明によれば、初めての発作が起きたのは彼女が高校生の頃。その時は苦しくて本気で死ぬかと思ったらしい。それが原因で学校に通うのが難しくなり、通信制の高校に編入した。その後、愛咲の言う閉じ込められる感覚が怖いという症状が起きた——。

「最初にかケルとバスの中で会った時、つい生理現象とか言っちゃったけどあれ嘘なの。バスの中も苦手ですぐに降りたくなっちゃうの。二度目の時もカケルに言われた通り、ほんとは具合が悪かったんだ。でもまた、降りしてくれとか騒いで注目の的になっちゃうのも嫌だし、ずっと我慢してた。だからカケルが『止めて下さい』って言ってくれた時はすごく嬉しかったよ。ほんとにありがとね」

「いや、俺は何も・・・。でもそんな状況でよくバスに乗ってるね」

「乗らなきゃ生活していけないしね。でもすごく苦痛だよ。できれば乗りたくない」

「そうか。つらいよなあ。それは」

急に愛咲が泣き出したのがわかった。

「どうしたの」

「それでもいい？それでも私と付き合ってくれる？」

「何言ってるんだよ。当たり前だろ」

「ありがと・・・」

愛咲の肩が大きく震えた。

僕は正直なぜこんなことで愛咲が泣くのかわからなかった。病気なんていうから初めはぎくつとした

けど、そんなに大げさなことでもないじゃないか。とにかく変な病気じゃなくてよかった。

「それって、治らないの？」

「わからない。病院にも何回か行ったことは行ったんだけど・・・これといった治療法はないみたい。薬もあまり飲みたくないし」

「きっと治るよ。二人で治していこう」

「カケル・・・ありがと。ほんとにありがとう」

愛咲はまた泣き出した。僕は自分でもこれ以上はできないと思うくらい優しく愛咲を抱きしめた。

愛咲に言った言葉に嘘はなかった。二人で治していけばいい。バスが怖いなら僕と一緒にいてやる。簡単なことだ。もう泣かなくてもいいよ。

しかし僕は、この時まだ本当のことは何一つわかってはいなかったのだ。

愛咲が寝入ってから、僕はベッドからそっと抜け出しパソコンの前に座った。

広場恐怖。愛咲が教えてくれた言葉を打ち込んでみる。検索にかけると、かなりのヒット数だ。一番上に出てきたサイトを開く。

「広場恐怖（ひろばきょうふー agoraphobia、『agora=market place (GK)』）は、『もし何か（不安発作）が起きたら・・・』と恐れ、またそこに人だかりのできることを恐れる恐怖症。従って広場に限らず、旅行や家の外に出ること、群集、不安発作時に避難できない場所などが恐怖の対象となる。

成人早期の女性に多く、パニック障害を伴うことがある。治療はパニック障害に準ずる」

出典・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

――なるほど。広場恐怖っていうから、何となくだだっ広い場所が怖いのかと思ったら違うのか。そういえば愛咲もバスの中が怖いと言っていたもんな。と、僕は説明書きを目で追いながら自分なりに納得する。

それにしてもこの恐怖っていうのは一体どんな感じなんだろう。わかんないよな。いくら想像しても実感がつかめない。ただこれを読む限り、別に命にかかわる病気でもなさそうだし、どうってこともないんだろう。きっと。

僕は他のサイトを見ることも、出てきたページを保存することもせずそのままパソコンを閉じた。

翌朝。部屋中に漂うコーヒーの香りで目が覚めた。横に手を伸ばすと愛咲がいない。

「愛咲……？」

寝ぼけ頭のまま、身体を起こす。

「起きたの？」

愛咲の涼しげな声がした。無理矢理目を開けると、愛咲がキッチン（といっても、とってつけたように流し台が置かれた、非常にちゃちい代物だが）に立っている。そしてテーブルの上には食べ物がいろいろのっている。えっ、もしかして朝ごはん？

「ごめんね。冷蔵庫の中勝手に開けちゃった」

「そんなの全然いいけどさ、何もなかっただろ。買い物してなかったし」

「うん。だからあり合わせ」

マーガリンを塗ったトーストに、半熟仕上げの目玉焼き。野菜は冷蔵庫の中に唯一入っていたプチトマトときゅうり。そういえば一、二個残っていたはずのチーズも混ぜてある。

「ドレッシングが見当たらなかったから作っちゃった。ヨーグルトがちょっとあったし」

「へえ、すごいなあ」

あんなとぼしい材料で結構まともに食卓が整えられるもんなんだな。ちょっと感動モノだ。

「今コーヒーできるからね。ちょっと待ってて」

以外と家庭的なところもあるんだな。こんなふう二人で過ごす時間の束が増えるたびに、愛咲のそれまで知らなかった面がわかってくる。それが今は何よりも楽しい。

「今日、どうしようか」

僕は愛咲のいれてくれたコーヒーを飲みながら言った。正確に言えば、愛咲に聞いているというよりは自分自身に問いかけているようなつもりだった。

どこに行こう、何をしよう。せっかくの二人揃っての休日……。先週バイトの給料日だったから、

割と金もある……。天気もよさそうだ……。

「そうだ、遊園地にでも行こうか」

「遊園地……」

「まだ二人で行ったことなかつただろ」

「でも私あんまり乗れないよ。絶叫系とか苦手だし……」

「大丈夫だって」

「そうかな」

「大丈夫、大丈夫」

この時僕は、愛咲が抱いたはずの不安には全く気付かずに、

(遊園地はデートの定番だもんな)

そんなふうは無邪気なガキのごとく、愛咲の用意してくれたパンをかじりながら、ただ自分勝手なテンションの中にいた。

愛咲が微笑みの中でどれだけの揺らぎに耐えていたのかなど、ほんの少しも気にとめずに。

腹が立つほど僕はどこまでも能天気な男だったのだ。

発作

発作

初夏の晴れた日曜日。当然のことながら遊園地は混んでいた。

人気のある絶叫系のマシーンはどれも長蛇の列。実は僕は気弱そうな(?) 外見に合わず、こういうのが大好きなのだ。並ぼうかどうしようか迷っている僕の腕を愛咲が引っ張った。

「ねえ、カケル、私ほんとにだめなの。こういうの」

「大丈夫だよ。僕と一緒にだから」

「違うの。あの・・・昨日話したこと・・・」

愛咲が口ごもりながら下を向いた。

ああ。そうか。僕はすぐに愛咲の言いたいことを察した――と自分では思っていた。怖いのはだめなんだな。

「じゃあ・・・」

僕は首を回して周辺を見渡し、

「あれは？」

進行方向にそびえ立っている巨大な観覧車を指差した。

「観覧車・・・」

愛咲も同じ方向を見る。

「あれなら大丈夫じゃん？ 別に怖くないし」

「まあ・・・」

「よし、決まり」

僕は愛咲の手をとってその方向に駆け出した。自然に手をつなげるのもこういう場所のいいところだな。

観覧車は思った通り、比較的空いていた。僕たちはあまり待つことなく、その小さな個室に乗り込んだ。愛咲は向かい合わせには座らずに、僕の横に無理矢理腰を下ろし、身体をぎゅぎゅっと押し付けてくる。まるで一時も離れていたくないみたいに。

少々窮屈だけど、愛咲のそんな動作も僕にはたまらなく嬉しい。

たちまち眼下に街並みが広がる。

「すごくキレイだよ」

と言いかけた時のことだった。急に愛咲が僕の手をぎゅっと握ってきた。いや、ぎゅっどころではない。痛いくらいだ。

「どうしたの」

愛咲を見ると、横顔が真っ青だ。僕は、はっとした。

「出して！！！」

それが合図のように、愛咲が大声を出した。そして立ち上がり、ドンドンと窓を叩き始める。

「もう嫌。我慢できない。出して出して！」

「愛咲！」

僕は慌てて彼女を抱きしめる。

「ここから出して！出たい！出たい出たい出たい」

「大丈夫。大丈夫だから。愛咲。落ちついて」

あまりのことに僕は面食らっていた。どうしたらいいんだ。とにかく今はこうして愛咲の身体をしっかり抱きしめていることくらいしか思いつかない。僕の腕の中で愛咲が何度ももがく。

「出たいの。出たい」

「わかった。わかったから」

お願いだ。早く地上に着いてくれ。僕は心の中で必死で祈る。観覧車に乗ってこれほど時間が長く感じたのは初めてだ。

ようやく観覧車が地上についた。僕も愛咲ももう汗だくだ。

「大丈夫ですか」

異変を感じていたらしい係員が、扉を開けながら怪訝な顔で聞いてくる。

「すみません。何でもありません」

僕は何事もなかったように笑顔を作り、その辺にいる人たちに愛想を振りまきながら愛咲をつれて素早くその場を離れた。

一体何が起こったんだ？まだ僕の中では動揺が治まらない。とりあえず愛咲を木陰のベンチに座らせる。

「何か飲み物買ってくるよ」

「いい。そばにいて」

愛咲が慌てたように僕を引き止める。

「・・・うん、わかった」

どのくらい二人で座っていただろう。

「ごめんね」

愛咲がポツリとつぶやいた。どうやら少し落ちついてきたようだ。

「観覧車もね。ほんとは苦手なの。でもせっかく遊園地に来たのに、何も乗れないのもカケルに悪いでしょ。もしかしたら大丈夫かと思ったけど、やっぱりだめだった・・・。ごめんね。迷惑かけちゃってほんとにごめんね」

「いや、無理に乗らせた俺が悪かった。ごめん」

愛咲はぼろぼろと泣き出した。

「泣かなくてもいいよ」

そう言いながら実は僕も一緒に泣きたかった。

愛咲が抱える広場恐怖という病気。もしかしたら僕が想像していたよりずっと大変なものなのかもしれない。だとしたら、「二人で治そう」なんて簡単に言ってしまったのは間違いだった・・・？ 僕が甘かったのだろうか。いや、今さらそんなふうに考えるのは、愛咲に対して卑怯だ。

僕はまだ小刻みに震えている愛咲の肩を抱き寄せた。

「大丈夫だよ」

そうだ。僕まで気落ちするわけにはいかない。つらいのは愛咲なんだから。僕が守ってやらなければ。絶対に。

僕らは楽しげな人々でにぎわう遊園地の片隅で、いつまでも同じ姿勢のまま座り続けていた。

広場恐怖

広場恐怖

愛咲と付き合っていくうちに、愛咲の言う「広場恐怖」という症状がどんなものか、僕なりに少しずつわかってきた。とにかく苦手なことがたくさんあるのだ。

まずその筆頭が乗り物だ。バスや電車は空いていればまだいいのだが、少しでも混んでくるともうだめだ。すぐにでも降りたくなってしまうらしい。

それでもバスや電車は生活していくのに絶対に必要なので何とか乗っているが、飛行機や船、ボートなどは論外だ。簡単には外に出ることのできない空間に長時間居続けるなんて想像するだけで気が変になる・・・らしい。

公共の乗り物だけではなく、車もあまり得意ではない。まずドアのない後部座席。つまりツードアの後部シートやワゴン車の三列目シートには乗れない。前の人移動しない限りすぐに外に出ることができないからだ。他にも、高速道路、渋滞、右車線の走行、右折することなど車に関して苦手なことは数知れない。いずれの場合も、既出の通り、すぐに外に出られないという状況であることがその理由だ。愛咲自身、運転免許は持っているが、運転すること自体が困難なため、今はペーパードライバーになっている。たとえば、国道などで右折するために、直進者が行き過ぎるのを待っている間、「今、具合が悪くなったらどうしよう」などをつい考えてしまい、そんなことの繰り返しでどっと疲労困憊してしまうらしい。実際に運転中何度も具合が悪くなったこともあるようだ。

タクシーも知らない運転手に気をつかうため、できれば利用したくない。もし後部座席の真ん中に座ることにでもなったら・・・とその状況を考えただけで冷や汗が出てくるという。

デートの場面で難しいのは映画、コンサート、ライブといったところだ。まず映画館でははじっこの席にしか座れない。愛咲の場合、普通の人のようにどこが見やすいかという視点で席を選ぶわけにはいかない。むしろ一番見やすい真ん中の席などは絶対に選べない。真ん中の席しか取れない時には映画をあきらめるしかない。

コンサートやライブはもっと大変だ。必ずはじっこの席に座る、というわけにはいかないし、コンサートが始まると容易には外に出られなくなるため、まず愛咲は行きたがらない。同じような理由で講演会などもだめ。自分の意思で戻れない長い列なども無理だ。

個人の生活では、歯医者と美容院がひどく苦痛なことらしい。どちらも椅子に座らされ、自分の意思では動けないからだ。だから美容院ではパーマをかけたりカラーをしたりといった時間のかかることはしない。なるべく短い時間ですませられるようにカットだけ。愛咲の髪はきれいな茶色だが、それは自分でやっている。

歯医者は単純に僕と同様痛いのが怖いのかと思ったら、そうではない。やはりあの診察椅子にじっと座っていることがものすごく苦痛なのだそうだ。

「思い切ってカミングアウトして、休みながら治療してもらえばいいよ」

アドバイスのつもりでそう言ってみたが、そういうことを言って特別な目で見られたり過剰に気を使われたりすると、かえって辛くなるのだそうだ。何とか無事に治療を済ませるには毎回かなりの精神統一が必要らしい。

それからエレベーターもだめだ。閉じ込められる感覚がたまらなくつらいという。エスカレーターもちょっとでも長いものは乗れないので、愛咲と歩くときはいつも階段を利用する。レストランでも二

人並んで座る場合、奥には座れない。高層階の部屋にもいられない。息苦しくなってくるらしい。ざっと僕があげただけでも苦手なものがこれだけある。僕だったらとてもじゃないけど、生きていけないかもしれない。

ただわかったのは、愛咲は病気だからといって、それから逃げることは絶対にしていないということだ。苦手なことでも逃げずにむしろ積極的にトライしようとしている。それがよけいに痛々しい。愛咲のことがわかってくればくるほど守ってあげたい気持ちが強くなっていく。愛咲を守りたい。愛咲の力になりたい。

そんなわけで、愛咲とのデートはいろいろな意味で制約があるものにならざるをえなかった。でも愛咲の苦手なことさえ避ければ、愛咲といるのは僕にとってこのうえなく幸せな時間だった。二人っきりで道を歩きながらいつまでもたわいのない話をし続けること。それだけで僕はよかった。愛咲が愛しかった。

ターコイズ

「来週、大学の試験なの」

二人で久しぶりに焼き肉デートをした帰り道、愛咲が言った。愛咲が在籍している通信制大学の試験日がせまっているらしい。

「別に心配することないだろ。普段から愛咲、結構勉強頑張ってるじゃん」

「うん・・・」

「大丈夫だって」

「違うの」

愛咲が少し言いよどむように口ごもった。

「違うって？」

「だから・・・例の病気」

ああ、そうか。広場恐怖、だ。僕はまた自分の無知を実感した。試験もだめなのか？

「試験そのものじゃなくて、あの雰囲気・・・。すごく緊張しちゃうの。試験中は席を立つことはできませんとか言われると・・・ああ、もう動けないんだな、ってかまえちゃって・・・」

そうか。なるほどな。試験中はむやみに動いたりできないもん。閉じ込められている気分と同じかもしれない。

「これでもね。もともと勉強は嫌いじゃないの。でも大勢で講義を聴くとか、試験を受けるとかそういうのが難しくて。だからできるだけそういうことをしなくてもすむように通信制を選んだんだけど、それでも今度みたいに最低限、試験やスクーリングはあるしね。何とかしなくちゃとは思ってるんだけど」

そうか。そういうことなんだ。だめだな。頭ではもうすべてわかったつもりでもやっぱりまだまだだ。

「大丈夫だよ」そう言ってあげるのは簡単だ。でも僕は言えなかった。軽々しくそんなことを口にしたところで、ただの気休めだと愛咲は見抜いてしまうだろう。言葉じゃだめだ。何か、何かないだろうか。愛咲を励ましてあげられる方法が。

うわっつらだけの言葉じゃなく。何か――。そうだ。僕はふと思いついた。

「愛咲。誕生日って十二月だったよね」

「え、そうだけど？」

「ちょっとここで待ってて。すぐだから」

僕は愛咲をそこに残したまま、今来た道を逆戻りにダッシュした。

確かさっき通った時あそこに――。あった。ここだ。僕はいまだかつて足の先さえも踏み入れたことのない宝石店に入った。こんな場違いなところに来てどうするんだ？

僕の内なる声が問いただす。僕だって知らない。でも急に思いついたんだ。もう仕方がない。

「いらっしゃいませ」

キレイな店員さんが入ってきた僕を見て、微笑の上にあからさまにげんな表情をはりつかせる。どっから見ても金なんか持ってなさそうな学生だからな。仕方がない。

「何をお探しでしょうか」

「あの、ターコイズの指輪を――」

「贈り物ですか？」

「はい」

店員さんが様々なデザインの指輪をケースから出して目の前に並べてくれる。どれがいいのか僕にはよくわからない。でもあまり大きな石がゴロンとついているようなものよりはもっと可憐な感じのデザインのほうが愛咲には合っているような気がする。

いや、それよりももっと重大な問題があったんだ。

あの、もうちょっと安いのを・・・なんてさすがに愛咲の前では言いづらいもんな。

店員さんがまたいくつか新しいものを出してくれる。その中の一つにふと目がとまった。小さなブルーのトルコ石が三つデザインされたシルバーの指輪。アクセサリーのことなんかさっぱりだから、ただの直感でしかないけど、愛咲の指に似合いそうな気がする。

「こちら、若い女性に今とても人気なんですよ」

僕の視線に気付いた店員さんがすかさずそう言う。

「はあ」

問題は・・・まあいいや。この際仕方ない。カードで買ってしまえ。今月バイトの時間を増やせば何とかなる。とりあえず愛咲が四月生まれじゃなくてよかった。

「サイズはいくつでいらしゃいますか」

「は」

僕ははた、と困った。げっ、わかんねえ。どうしよう。でも今さらここに愛咲を連れてくるのもな。

「一般的なサイズってどれくらいなんですかね」

「そうですねえ。お付けになる指にもよりますが、女性の方でしたら一般的には九号から十一号くらいの方が多いとは思いますが」

「じゃあそのへんでいいです」

と自分でもあきれほど適当なことを言って僕はそれを買うことにした。

カードの明細にサインをするのももどかしく、包装も断り、僕は買ったばかりの指輪をにぎるように持って急いで愛咲のところに戻った。

愛咲がいかにも手持ち無沙汰といったふうに立っている。

「ごめん、愛咲」

「もう、どうしたの。急に」

「はい、これ」

ハダカのままの指輪を差し出すと、愛咲は驚いてそれを受け取る。

「カケル、これ・・・」

「お守り」

「え？」

「これを付けてれば絶対乗り切れるから。試験中にもし具合が悪くなりそうになったらこれを見て僕を思い出せばいいよ。そうすればきっと大丈夫だから」

僕は息を切らしながら一気にしゃべった。

僕たちの間に少しだけ沈黙が広がる。

「ありがとう。嬉しい」

「はめてみてよ」

と、できるだけさりげなく言いながら内心はドキドキだった。何しろサイズが適当だからな。

「すごい。ぴったり」

愛咲がそう言ったときには心底ほっとした。サイズの交換に愛咲と二人でまたあの店に行くのはちょっとカッコ悪いもんな。

「でもよくわかったね。私のサイズと誕生石」

まあな。僕は心の中で胸をはる。

サイズはともかく誕生石の方は、実は愛咲と付き合いだした頃、いつかこんなこともあるんじゃないかと思ってひそかにネットで調べておいたのだ。もっともトルコ石というものの実物を見たのは今日が初めてだったけど。

「私、男の人から指輪もらったの初めて」

思わず、僕もだよ、と言いかけてやめる。たぶんそういうことは黙っていたほうがいい。

「ありがとね。大事にする」

愛咲の試験当日。僕は大学の門の前で愛咲の試験が終わるのを待っていた。

本当はバイトが入っていたのだけど、同期のヤツに頼み込んで無理矢理シフトを代わってもらった。

愛咲にはああ言ってはみたものの、やっぱり心配だった。バスに乗る時のように愛咲のそばについてやることができないなら、せめて少しでも近くにいて愛咲に安心感を与えてやりたかった。試験の途中で愛咲が教室から出てきたりすることのないように、と僕はそれだけを祈っていた。

終了時間の予定より少し遅れて愛咲が走ってきた。どうだった、と僕が聞く前に、

「大丈夫。何とか頑張れた」

うっすらと汗ばんだ顔をほころばせながら言う。

「だから言っただろ」

「これのおかげだね」

愛咲が僕の贈った指輪をした左手をひらひらさせながら、夏のひまわりみたいに笑った。

この時の僕たちはきっと誰よりも幸せの絶頂にいた。

――でももしかしたら、この頃から僕の神経は少しずつ少しずつすり減っていたのかもしれない。自分でも気付かないほどに少しずつ。

ディズニーランド

ディズニーランド

夏休みに入る頃には、僕も大学生活にだいぶ慣れてきた。たまたま講義で何回か隣になったことがきっかけで、ヤスという親友もできた。ヤスは、ごつい外見に似合わずテニスサークルに所属している。

三日ぶりに大学に出てきた日。食堂で、
「おまえ、夏休みどうすんの？」
とヤスに聞かれた。

「どうすんの、って言われてもな。別に何も無いよ」
本当だった。バイトはびっちりだし、帰省すらできるかどうかあやしいところだ。
「サークルのやつらとディズニーランドでも行くかって話が出てるんだけどさ。一緒にいかねえ？」
「ディズニーねえ」
「彼女も連れてこいよ」
「えっ」

「他にも彼女連れてくるヤツいるみたいだし。俺にも会わせろよ」
そうだな。愛咲と会う時はいつも二人きりのことが多いし、たまには大勢で遊びに行くのもいいか。それにみんなに愛咲を紹介するいいチャンスだ。

「ああ、いいよ」
僕は快諾した。問題は愛咲だ。
愛咲に言うと、案の定
「でも私あんまり乗れるものがないし、迷惑かかるし」
とぐずぐずと渋っている。この反応は予想通りだ。
「そんなの気にしなくていいよ。僕がいるし、そもそも気を使うような連中じゃないから、気楽に考えてよ」

もう拒めないとおきらめたのか、何度目かの説得で、愛咲はさも嫌々といった顔でうなづいた。

当日、待ち合わせの駅に愛咲を連れて行く。
ヤスに、サークルの他のやつらとそれぞれの彼女たち。もちろんサークルのメンバーには女子もいる。みんなに愛咲を紹介する。

明るく挨拶してはいるものの、愛咲が内心ひどく緊張しているのが、僕には痛いほどわかった。
「大丈夫。嫌なものは乗らなくていいからね」

僕は愛咲の耳元でそっとささやいた。
「うん」

夏休みに入って最初の週末。パーク内は混んでいた。
みんなは中に入ったとたんさっそく列に並び始める。だけど、当然愛咲の乗れるものはない。僕も愛咲に付き合い、出口のところでみんなを待つことになった。

こんな状況で愛咲が何とも思わないはずはない。当然だ。みんなが三つ目のアトラクションの列に並びだした頃、とうとう愛咲が切り出した。

「カケルもみんなと一緒に乗ってきて」
「いや、いいよ」

「でもこれじゃ、かえってみんなに気を使わせちゃうよ。私のことはいいから」

「でもなあ」

「私、ここでお茶飲んでるから。行ってきて」

「じゃ一回だけ。すぐ戻るから」

僕は愛咲の笑顔に送られて、みんなのいるスプラッシュマウンテンの列に並んだ。愛咲には一回だけと言ったものの、乗り終わってからもついノリでみんなと一緒に他のものにも乗ってしまう。

愛咲には悪いと思いながら僕はひそかに開放感を感じている自分に気がついていた。

隣にいる子が、具合が悪くならないかと気にすることもない。好きなものに乗れ、思った通りに行動できる。そのことがこんなに楽しいことだったとは。新鮮だった。楽しい、と心から思った。

よし、これで最後だ。これに乗ったら愛咲のところに帰ろう。そう自分に誓いながらホーンテッドマンションの列に並ぶ。隣はテニスサークルの女子だ。一、二度話したことがある。名前は確かユイだ。

僕とユイを乗せたブランコがゆっくりと動き出す。

「彼女は？」

「外で待ってるよ」

「一緒に乗らないの？」

「彼女、こういうの苦手なんだ」

「そう」

答えながら、これも愛咲には無理だろうな、と思う。見覚えのある幽霊が目の前にせまってくる。

「キャッ」

ユイがいきなり僕の腕に抱きついてきた。

「こんなことしたら彼女に怒られるよね？」

「いや・・・」

「ね。今度は二人でこない？」

ユイのどこかからかうような誘いの言葉を、僕はなぜかはっきり断ることができなかった。自分でも情けないほどに。

出口を抜けて急いで愛咲のところに戻る。カフェの椅子に座っていた愛咲が僕を見つけて小さく手を振っている。ごめん。と謝りながら僕は急いで駆け寄った。

この時、愛咲に悪いと思う気持ちと、浮き立つ気持ちのどっちが勝っていたのか、僕にもわからない。僕は自分の気持ちをごまかそうとして、愛咲が嫌がるのもかまわず彼女の肩をきつく抱き寄せた。

愛咲

愛咲は基本的に優しいいい子だった。が、扱いにかなり難しいところがあることも事実だった。

初めて関係をもった夜から、週末は大抵僕の部屋で一緒に過ごすことが多くなっていたが、愛咲が泊まった日の朝は大変だった。愛咲が僕をなかなか離してくれないのだ。たくさん「愛してるよ」と言って、ぎゅっと抱きしめてを何度も繰り返してからでないと離れることができない。バイトに行くにもひと騒動だ。

とにかく愛咲はいつも僕と二人でいたがった。もちろん初めは愛咲のそんなところがたまらなくかわいかったし、愛しいと思ったが、日を重ねるごとにだんだん僕の中で戸惑いのほうが大きくなっていくのを、自分でも自覚しながら僕にはどうすることもできなかった。

また、普段のなにげない会話も陰悪な雰囲気を引き起こす原因になった。特に家族の関する会話はいつもそうだった。

「カケルの家ってどういう家？」

「どういうって別に普通だよ」

「親と仲がいいんだ」

「いや、別にそういうわけでも・・・とにかく普通だって」

「うちはね。親は私のことなんか全然かわいくないみたい。昔からそうなの」

「そんなことないだろ」

「ううん、そうなの。何かと妹の方ばかり。私はこの通り不良品だから」

「何言ってるんだよ。そんなことないって。自分の子供がかわいくない親なんていないんだぞ」

とでも言ったら最後、

「ふーん。カケルは幸せに幸せに育ったおぼっちゃまなんだね」

とくる。

「いいよね、何にも知らないおぼっちゃまくんは」

そうまで言われればさすがに僕もむっとするが、そういう時は愛咲は絶対に謝ってこない。結局僕が折れる羽目になる。ごめんね、と意味もなく謝りながら僕は愛咲との関わりに心底疲れを感じる。

でも、

「私の病気のこと、誰に話しても『そんなの気もちようだ』っていう人ばかりで、ずっと辛かったの。誰にもわかってもらえないんだな、って。でもカケルに話した時、それはつらいね、よく我慢してたね、って言ってくれて。あの時はほんとに嬉しかった。あんなふうに私に言ってくれたのは今までカケルだけだったよ」

そんな話を聞けば単純に嬉しかった。愛咲にとって僕は特別なんだ。そう思うと、みんなの前で表彰された小学生みたいに誇らしい気分になる自分がおかしかった。

やっぱり僕は愛咲のことが大好きだった。

みんなでディズニーランドに遊びに行って以来、僕とユイはちょくちょく二人で合うようになった。お互いの空き時間に学校の近くのカフェでお茶したり、たまには軽く飲みに行ったり。とはいえ、当然ユイとはただの友達であり、それ以上のことは何もない。ユイはさすが心理学科の学生で、人の話を聞くのが上手い。僕はつい愛咲の病気のことも聞かれるままユイに話してしまっていた。

「広場恐怖ねえ」

「知ってる？」

「ううん。よくわからないけど・・・カケルくんの話聞いてるだけで、大変だなあと思っちゃった」

「だろ？マジ大変なんだよ」

そう言い放った瞬間、僕は清々しさを覚えた自分にちょっと驚いた。

「病院は行かないの？」

「さあ、どうなんだろうな」

「ちゃんと専門家に診てもらった方がいいよ」

「でもあいつ、病院になんか行くかなあ」

無理かもな、と僕は思う。きっと愛咲は病院には行きたがらないだろう。

「だってこのままじゃカケルくんの方が疲れちゃうよ。なんか彼女よりカケルくんの方がかわいそう」

「いや、そんなことは・・・」

病院かあ。愛咲に話してみてもいいかもな。

ユイと話しているうちに、僕はそう思い始めた。大体このままじゃ愛咲のためにもよくないしな。よし、愛咲に言ってみるか。

しかし・・・。

「行かない」

予想した通り、愛咲は間もおかずに言った。

「何で？」

「前にもね、何度か病院に行ったことはあるの。でもろくな医者がないんだもん。みんな薬出しマシン」

「薬出しマシン？」

「患者の話なんか全然聞いてくれないの。すぐに、じゃあお薬出しときましよう、ってそれだけよ。あんなんだったら私にもできるわよ。どんな患者が来たってただ薬を出せばいいんだから」

愛咲は珍しく興奮して言った。よほど嫌な思いをしたんだな、と思った。でもここで引き下がるわけにはいかない。

「だけどさ、みんながみんなそんな医者ばかりとは限らないだろ」

「みんなおんなじよ。まともな医者なんているわけないもん」

「そんなのわからないだろ。な、行ってみようよ。俺も一緒について行ってやるからさ」

「だけど・・・」

「とにかく俺に任せてよ。実はいい病院知ってるんだ」

「えっ、カケルが？」

「まあね」

「どうして？」

「いや、ちょっとね。すごくいい先生だから」

僕は自慢気に言った。実はユイに、ある病院を紹介してもらったのだ。何でもユイの友達の彼氏のそのまた友達？とかが通っていて、結構流行っているらしい。

「今度行ってみよう」

ということで、数日後、僕はあまり乗り気でない愛咲をつれてユイに教えてもらった「ナガセメンタルクリニック」に出かけた。

目的の病院は、ビルの五階にあった。

愛咲はいつもそうするように、ビルの中に入るとまず階段を探した。

だがどんな構造のビルなのかあるはずの階段が見つからない。仕方なくエレベーターを使ったが、乗ってみると中は大人二人立つのがやっとの広さしかない。

ここまでで愛咲はすでに気分を害し始めたようだ。

「こんなビルの上層階にクリニックを作ること自体、患者のことを何もわかっていない証拠なのよ。専門家だったらエレベーターが苦手な人がいるってことくらい理解してはくちやいけないのに」ということらしい。

「まあまあ」

文句を言っている愛咲を何とかなだめて、病院の中に入る。

待合室は結構混み合っていた。が、予め予約をしていたので、すぐに名前を呼ばれる。僕も一緒に行こうとしたが愛咲が一人でいいというので待合室で待っていることにした。

愛咲が、診察室のドアを開けた瞬間、「こんにちは」という医師の声が聞こえた。顔は見えないが、聞いた限りではいかにも温厚そうな紳士といった感じの声だ。僕はちょっと安心する。

大体メンタルクリニックなどというところに来たのはこれが生まれて初めてだ。

愛咲よりも付き添いの僕の方が絶対に緊張していたが、こっそり周りを見回してみると、ここにいるのはみんなごく普通の人たちだ。僕と同年代の学生っぽい人や、忙しそうに手帳をくくっているスーツ姿のビジネスマンもいる。一見すると、みんなどうしてこんなところに用事があるんだろう、というような人たちばかりだ。精神科といっても、何も特別な人だけが来るわけじゃないんだな。

そう思うと僕はようやく気が落ち着いてきて、傍らの雑誌を手に取り、ソファの背もたれに身体を預けた。

十五分、いや、二十分くらいはたっただろうか。診察室から愛咲が出てきた。

受付でお金を払い、外に出た瞬間、愛咲はもう二度とここには来ない、と言い出した。

「来ないって、何でだよ。次の予約もしたんだろ」

「そんなの、キャンセルすれば済む話でしょ」

「そういう問題じゃないだろ。何が気に入らないんだよ。優しそうな先生だったじゃん」

「だって・・・やっぱりわかってくれないんだもん」

「だから何が」

「ちょこっと私の話聞いて、ああそうですか、そういうことはよくあるんですよね、ってそれだけよ。それだけ。カケルも待ってたからわかるでしょう？十分や二十分で何がわかるの？意味ないわよ、あんなの」

「それはさ・・・」

「診察っていつでも医者として何の分析も指導もなく、ああそうですか。じゃあこれを、ってすぐに薬出そうとするし。今までの医者とおんなじよ」

「そんなこと言わないで、せっかく今日診察受けたんだからちゃんと通えよ」

僕は少しむきになっていた。ユイにせっかく紹介してもらったのに、という気持ちがどこかにあったせいかもしれない。

「もういいの。これは一生治らないんだから。上手に付き合っていくしかないのよ」

「何言ってんだよ。治す努力をしなければだめだよ。いつも誰かが助けてくれるわけじゃないんだぞ。自分から治そうって思わないと。いつまでも苦手だ苦手だと言ってたって何も変わらないじゃないか」

「ふうん・・・カケルもそういうこと言うんだ」

愛咲がひどく悲しそうな顔をした。

「いや・・・ごめん」

すぐに後悔した。僕はどうしたんだろう。一番苦しんでいるのは他でもない愛咲なのに。そのことも僕は充分わかっていたはずだった。守ってあげる、と約束したのに。

「ごめん」

もう一度そう口にしながら、僕は急に襲ってきた砂をかむような空しさをかみしめた。

悲しき休日

悲しき休日

大学に入って初めての夏休みが終わった。休み中は、お盆の頃に一度帰省しただけで、あとはほとんどバイトとたまっていたレポートの仕上げで終わってしまった。

もちろん愛咲とも今まで通り時間を作って会っていた。

数日ぶりの学校。ヤスと食堂で顔を合わせた。こいつと合うのはいつも食堂だ。

「おう、カケル。こっちこっち」

「おまえはいつも元気だな」

「おう、それだけが取り柄だかな。な、またみんなでどっか行こうぜ」

「どっかって」

僕はカツ丼のカツを口に入れながら気のない相槌を打った。

「この前は悪かったな。あとでユイから聞いたんだけどおまえの彼女、ああいうとこ苦手なんだってな」

夏休みに行ったディズニーランドのことか。

「いや、そんなの気にしなくていいって」

「でさ。今度はジンギスカン。どう？外でみんなで食うの」

「バーベキューか」

外・・・外か。それなら大丈夫かもしれない。

「そうだな」

「よし、じゃ決まりな。俺、車出すから」

「いや——俺が運転するよ」

僕は自分から運転手役を買って出た。愛咲の持病（あえてこう呼ぶことにしよう）の問題について僕は、慣れることが大事なのではないかとひそかに思っていた。いろいろトライしてみて、「今回は大丈夫だった。何も起きずに済んだ」という自信をつけること。そうしたプラスの経験を積み重ねていけばきっとよくなるはずだ。

いや、そうに違いない。というか、それしかない。この半年近く、愛咲と付き合ううちに僕はそんなふうを考えるようになっていた。

「え——私、あんまり遠いところには行きたくないな」

案の定、遠出することを拒む愛咲を、僕は半ば強引に連れ出した。

「僕がずっと運転するから。愛咲は助手席に乗ればいい。それなら安心だろ」

僕の思った通り、助手席に座った愛咲は特に辛そうな様子もなく、みんなにアメなどを配ったりして、終始楽しそうにしていた。

よし、これは幸先がいいぞ。天気は快晴。暑くもなく寒くもない。気のいい仲間たち。僕もハンドルを握りながら、すっかり楽しい雰囲気にはたっていた。愛咲だって同じはずだ。何一つ疑うことなくそう思っていた。

それなのに——ああ、なんてことだ。ちょうど僕たち一行が現地に着いた頃、突然雨が降ってきたのだ。それも大雨。しゃれにならないほどの。これではバーベキューは無理だ。

「あーあ、誰だよ。日ごろの行いが悪いやつは」

「そういうヤスが一番あやしいよ」

などと軽口をたたきあいながら、僕たちはバーベキューを取りやめ、代わりにレストランに入ることにした。

何しろ僕はもちろん、みんな朝からろくなものを口にしていない。もう空腹は限界だった。ちょうど少し先にレストランがある。僕はその丸太小屋風のステーキレストランの駐車場に迷わず車をすべらせた。

レストランの中はだだっ広く、香ばしいニンニクの香りで満ちていた。皆適当に席に着く。

カップルは自然と向かい合う形になったが、愛咲はたまたま三人掛けの席の一番奥に座ることになってしまった。その場所は、横の人にどいてもらわなければ、すぐに動くことができないため、愛咲の苦手な席だ。一瞬大丈夫だろうか、と心配したが、ここでわざわざ僕が席を変えるように頼むのも変だろう。みんなで取り合うようにしてメニューをながめているうちに、僕の頭からそんな心配はきれいさっぱり消えてしまった。

愛咲がどんな努力をして、苦手であるはずのその場所に座り続けていたかということに、愚かな僕は気付いてやることができなかった。

帰りも予定外のことがおきた。女子たちがトイレに行っている間に、俺と一緒に店を出たヤスが助手席に乗り込んできてしまったのだ。

その流れで愛咲は、女の子たちと一緒に後部座席、しかも真ん中に乗ることになってしまった。これも愛咲のひどく苦手な席だ。まずいな。嫌な予感がした。

だが、まさかヤスに「そこは愛咲に座らせたいからおまえは後ろに行け」と言うわけにもいかない。僕だって愛咲と知り合うまで、世の中にこんななんでもないようなことをひどく苦手にする人間がいるなんて知らなかったし、ここにいるみんなにいきなり理解してもらおうとするのは無理がある。ヤスも悪気があるわけではない。

大丈夫かな。僕は愛咲の顔をルームミラーで確認するように見た。別に変わった様子はない。とにかく大丈夫だと思うしかない。このまま何事もなくイベントが終わればきっとこれが愛咲の自信につながるはずだ。

僕はそう自分に言い聞かせ、エンジンキーを回した。

車が走り出して十分くらい過ぎただろうか。

「降ろして！」

突然、愛咲の絶叫が車内に響き渡った。やばい！僕は激しく動悸がしてくるのを必死でこらえて何とかアクセルを踏み続ける。

「どうしたの？大丈夫？」

「具合でも悪いの？」

みんなが驚いて一斉に愛咲に言葉をあびせかける。

「いいから今すぐ降ろして。お願い」

「わかった、わかったからちょっと待って」

僕は慌てて路肩を探して車をとめる。そしてすぐに運転席を飛び降り、愛咲を車から出す。愛咲はポロポロと泣いていた。

「ごめんね、カケル。私ずっと我慢してたの。もうちょっとだと思ったんだけど・・・でもどうしても・・・」

「いいよ。無理に連れ出して悪かった。ごめん」

「せっかく誘ってくれたのに・・・ごめんなさい」

「いいから」

失敗だった。僕が甘かった。僕は、ヤスたちの前にもかまわず、愛咲を思い切り抱きしめた。まるで珍獣でも見るかのようなみんなの視線が痛いほど突き刺さってくる。

いや。僕なんかよりも愛咲の方がずっとその痛みを感じているはずだ。そう、一番つらい思いをしているのは僕なんかじゃない。愛咲なのだ。

言葉

言葉

「この前はびっくりしたわ」

ユイが砂糖を入れたキャラメルラテをかきまぜながら言った。

「ごめん。みんなを驚かせちゃって」

「カケルが謝ることじゃないよ。でも・・・パニック障害の発作ってあんなふうになるんだね」

「うん、まあね」

「こんな言い方、他人事みたいで申し訳ないけど・・・大変だね」

「・・・」

僕は黙ったままコーヒーをすすった。

あの時のことで一番傷付いたのは他ならぬ愛咲自身だ。彼女に自信をつけてやりたいという気持ちが裏目に出てしまったことで、僕もひどく責任を感じていた。

「やっぱり病院に通うのはだめそう？」

「たぶんね。せっかく紹介してくれたのにごめんね」

「そんなのいいけど。医者とも相性があるから。でもこのままじゃ彼女もかわいそうだよな」

「うん・・・」

このままではいけない。愛咲を病院につれて行かなくては、という気持ちは当然あったが、一方で、愛咲の訴えることもわからないでもない、と僕は思っていた。

愛咲のような場合、薬も時には必要かもしれないが、それよりもまずじっくり話を聞いてあげることが大切なのは、という気がした。そもそもなぜこういう症状が起きたのか。きっかけとなるようなことはあったのか。そしてこれから改善していくためには、具体的にどのような方法があるのか。薬を処方することだけがメインの診療ではなく、じっくりと患者の心に沿ってやる。そんな治療が必要なのではないか。

とはいえ、そんな医者のいる病院が一体どこにあるのか、僕には知りようもない。

まさか全国のクリニックを愛咲と一緒に片っ端から尋ねて歩くわけにもいかないしな。

「どうにかしてあげられるといいね」

「そうだよな」

何だかさっきから生産性のない会話ばかりだ。そもそもこれは僕と愛咲の問題だ。こんなんじゃせっかくお茶に付き合ってくれているユイにも悪い。

「そろそろ行こうか」

僕とユイは、トレイをカウンターに返し、店の外に出た。バイトに行くまでにはまだ少し余裕がある。これから青山に買い物に行くというユイに付き合って、最寄りの駅まで一緒に歩く。駅まではほんの数分だ。

「じゃ」

「またね」

ユイと別れ、僕は時間つぶしに新しいモデルのパソコンでも見に行くか、それとも本屋で立ち読みにふけるかどっちにするかな、などと考えながら歩き出した。腹が立つほどのんきなものだった。

まさかその場面を偶然愛咲に見られていたなんてことに、この時の僕はこれっぽっちも気付いてはい

なかった。

いつもと同じ週末の夜。アパートの近くのファミレスで食事を済ませ、二人でテレビを見ていると、
「ねえ。カケル、つまらないでしょ。私としても」

愛咲がいきなりそう言い出した。

「どうしたんだよ。急に」

僕は、テレビの画面から目を離さずに答える。

「はっきり言って」

「いや、だからどうしたんだって」

いつもの、愛咲の言葉遊びが始まったのはわかっていた。わざとすねてみせるのは愛咲のお家芸だ。いつも僕の気持ちを確認するみたいに、こうしたわけのわからないことを言い出す。そして、そんなことないよ、とか、大好きだよ、とか、その種の言葉を僕が何回か口にして終わりになる。いつものこと、儀式みたいなものだ。

僕はちょっと胸に胃もたれのような重さを感じ、リモコンをパチパチと換えた。

「私なんか、もう嫌いになったでしょ」

「そんなことあるわけないだろ」

「カケルの友達にも嫌な思いさせちゃったし」

「だからそれはもう終わった話だろ」

「はっきり言っていいの」

「だからそんなことないってば」

「カケルだって、ほんとはもうこんな女めんどくさいとか内心思ってるんでしょ」

「何だよそれ」

「他の人がよくなったら、いつでも乗り換えていいんだからね」

ここで僕は初めて愛咲がユイのことを言っていることに気がついた。

「あのさ、何か勘違いしてるみたいだけど」

「別にそんなことないもん」

「もしユイのこと言ってるんなら、彼女はただの友達だよ。愛咲も知ってるだろ」

「でも私といるより楽しいんじゃない？私とじゃあ、カケル私に気づかってどこにもいけないもんね」

「そんなことないって」

本当だった。嘘はない。どこに行けなくても何もできなくても愛咲と二人でただ道を歩くだけで楽しかった。それは僕の真実だ。

「あのヒトといたほうがカケルのためかもね」

愛咲が、僕にそんなことない、と否定してほしがっているのはわかっていた。

でも僕は何かひどく疲れていた。

「もういいかげんにしろよ。うんざりだよ」

自分でも信じられなかった。こんな言葉が僕の口から出てくるなんて。

ごめん、と言う間もなく

「もういい」

愛咲が部屋を飛び出して行った。僕は追いかけてなかった。いや、心では追いかけてなければと思ったのだが、どうしても体が動かなかった。なぜだろう。とにかく僕は疲れていた。考えてみればこの半年間、愛咲に振り回されてバイトも休みがちだった。ろくに勉強もしていない。友達とバカ騒ぎする時間もない。少しでいい、一人になりたかった。ほんの少しでいいから。そう、ほんの少しだけでよかった

んだ。

なのに――これっきり愛咲と会えなくなってしまうなんて、僕は思ってもみなかった。

別れ

別れ

愛咲と連絡が取れなくなったのはそれからだった。その日以来、携帯もつながらない。僕からとわかるとすぐに電源を切ってしまう。メールの返事もない。

それでも僕は決して深く考えずに、バイトに行き、時々大学にも顔を出し、といつも通りの生活を続けていた。

なんてことはない。そのうち愛咲の機嫌が直ればまた前のように戻るだろう。そうたかをくくっていたのだ。

もちろんその気になれば、愛咲のバイト先に行ってみることもできたし、待ち伏せすることだってできたけれど、僕はあえてそうしなかった。何となくそこまでするのはちょっと悔しい気もしたし、男のプライドなんてものがあるとしたら、そういうことなのかもしれない。

それでも愛咲のことが気にならない日は一日もなかった。毎日愛咲のことを考えていた。連絡がつかないまま日は過ぎていく。

だらしのないことに、やっぱりそろそろ会いに行ってみた方がいいかな、などと思い始めた頃、アパートに帰ると、ドアポストに封筒がはさんであった。

愛咲だ。僕は直感的にそう思った。慌てて封を切ると、中から僕が愛咲にあげたターコイズの指輪とこの部屋の鍵が転げ出てきた。

嘘だろ・・・。

僕は指輪と鍵を手のひらに乗せたまま、ばかみたいに部屋の前に立ち尽くした。

これは、僕と別れる、ということなのか？ そうなのか？

僕がガラでもなく男の意地みたいなくだらないものにこだわって何もしていないでいる間に、こんなことになっていたなんて。僕はこの時ようやく愛咲と別れてしまったことに気が付いた。自分は世界一のバカだ。救いようのないアホだ。

翳り始めた陽に染まったせいなのか、少しくすんだ色になったターコイズが、僕の手から静かに滑り落ちていった。

どんなに後悔しても、もう愛咲は戻ってこない。

僕は彼女が大好きだった。わがままのその底に、あんなに優しさをもった子はいない。強がりだけど、ものすごく繊細で甘えベタで、助けてもらっていたのはいつも僕のほうだったのに。そんなことに今さら気付くなんて。

街を歩きながら、バスや電車に乗りながら、つい僕は無意識に愛咲を探している。時々愛咲に似た子を見かけ、ドキリとするがいつも単なる見間違いだ。ベタなドラマじゃあるまいし、そんなに簡単に会えるわけないよな。

初めての恋愛なんて、こんなふうにあっけなく消えていくものなんだ。きっと。それを咀嚼しながら人は大人になっていくものなんだな。

僕は古い歌の歌詞みたいなフレーズで自分をなぐさめることしかできずにいた。

愛咲と別れた後、僕はユイと付き合いだした。気付いたら自然にそういうことになっていた。ユイと付き合うようになって、初めは何もかもが新鮮だった。映画も好きな席に座れるし、一緒にライブやコンサートにも行ける。長時間のドライブも、電車に乗るのもすべてOK。とにかくいつ発作が起きるかと気をつかわなくていい。そのことがこんなに楽でいられるなんて。そう思った。

けど、ユイと何かをするたびに、決まって愛咲のことを思い出す。

愛咲だったらどうしただろう。愛咲なら……。そのたび僕は心の中をユイにさとられないよう、わざとらしくはしゃいでみせる。

愛咲はまだ僕の中に住んでいた。

日曜日。待ち合わせの場所にユイが少し後れてやってきた。

「ごめんね」

「いや、俺も今来たところ」

「ね、今日は買い物に付き合ってくれない？普段着るコートがほしいのよ」

「うん、いいよ」

「サンキュ」

渋谷はいつもにも増して人出が多かった。

愛咲はこんな人ごみを歩くのも苦手だったっけな。いつも横道に入ろう、って言って俺の腕を引っ張ったんだ。

――ヤバイ、まただ。交差点が赤に変わる。僕は足を止め、複雑に交差する車の流れを目で追いながら、消しても消してもすぐに浮かんでくる愛咲の面影と格闘していた。

ユイの買い物に付き合っただけなのに、僕は大きなことに気付いた。

この先に、愛咲がバイトをしているコーヒーショップがあるのだ。このまま行けばあの店の前を通ることになる。午後の一時間過ぎ。この時間なら愛咲がバイトに入っている可能性が高い。ユイと一緒にいるところを愛咲に見られるかもしれない。

「カケル？どうかした？ポーッとして」

ユイの声で僕はふっと我にかえる。ばかだな。なんで今さら。こんなことを躊躇している自分がおかしい。

「いや、別に何でもないよ」

「ごめんね。すっかりつき合わせちゃって。疲れたでしょ」

「大丈夫だって」

「今日は私がゴハンおごるね」

ユイが甘えたように腕をからめてくる。僕は覚悟を決め、ユイと腕を組みながら愛咲が働いているかもしれない、ガラス張りの店の前を通り過ぎた。

瞬間、僕の周りだけふと時間の流れが変わったように景色が大きく揺らぐ。もし愛咲が僕に気付いたとしたら、僕たちの関係はもう完璧に終わったことになる。また胸が痛んだ。

そんなに深く考えることはないんだ。ただの通り過ぎていく恋の一つなんだから。それだけのことなんだ。

僕は無理矢理自分に言い聞かせた。

その後。ユイとはどちらからともなく別れた。

次の春が来る頃には、僕はまた一人になっていた。

再会

再会

一年後。無事三年に進級してもあいかわらず金はなく、僕はバイト三昧の毎日を送っていた。この夏もヤスの紹介で夏休みの間、中学校のプールの監視員のバイトをすることになった。

「こんな楽なバイトはないぞ」

とヤスが言っていた通り、バイト中僕はヒマを持って余っていた。監視員といっても名ばかりで実際にはほとんどやることがない。第一小学生ならともかく中学生にもなって夏休みに学校のプールを利用するやつなんてほとんどいないからな。それに、実際にプールでおぼれたりするやつはもっといないわけだ。

僕は手持ち無沙汰にプールサイドを歩きながら、数人のガキどもしかいない水面から、視線を何気なく校舎の方に移した。もちろんそうすることに意味なんか全くなく、ただの偶然でしかなかった。

—あれ……。

南向きの最上階の教室。その教室の窓にいるのは……愛咲？いや待てよ。そんなはずがない。どうせ見間違いだろう。と思い一度監視に戻ったが、どうしても気になる。一応確認してみるか。濡れると面倒なので外しておいたメガネをかけ、もう一度見てみる。

「！」

やっぱり愛咲だ。間違いはない。教室の窓側の席に愛咲が座っている。なんで愛咲が！？そうか。すぐに気付いた。そういえばさっきここに来た時、校門の横に看板が出ていた。……今日は教員採用試験の日なんだ。まさかこんなところで愛咲に会えるなんて思ってもみなかった。

「教師になりたい」いつか僕に話してくれたあの夢に向かって、ちゃんと頑張っていたんだな。つい嬉しくなるが、いや、だから何なんだと、僕はすぐにわれに戻る。

愛咲がどうであろうともう僕には関係ないことじゃないか。しかしどうしても気になる。もうガキどものことなんかどうでもよくなり、僕は吸いつけられたみたいに愛咲がいる窓から目を離せずにいた。

でも、普通ならこれで終わっていたはずだ。しかし……僕は気付いてしまった。愛咲の横顔が何となく苦しそうなのだ。

「勉強自体は嫌いじゃないの。でも試験を受けるのが苦痛で……。試験中は自分の都合で動けないでしょう。ずっと座っていることが辛いのよ」

と話していた愛咲の言葉を思い出した。

もしかしてまた……？僕はその瞬間、いてもたってもいられなくなり、思わずプールサイドを飛び出した。いくら暇とはいえ、これでは職場放棄だ。あとでヤスにも迷惑をかけることになるかもしれないと思ったが、もうそんなことどうでもいい。

愛咲のいる教室の下まで走っていく。ここまで来たのはいいが、ふと自分の格好に気がついて呆然となる。海パン姿に首からメガホンとホイッスルをぶら下げている。

こんな格好で教室に入っていくわけにはいかない。でも何とかしなければ。僕は必死だった。どうしよう。そうだ。ふと思いついてその辺に落ちている小石を拾う。

よし、これくらいの大きさがいい。

そしてまたプールに戻り、日誌などと一緒に置いてあるマジックを使い、その石を青く塗りつぶす。バイト仲間と生徒たちが、急に奇妙な行動をとり始めた僕を怪訝な顔で見ているが、とりあえず今はかま

っちゃいられない。

また愛咲がいる窓の下に戻り、できるだけ目立つように手を大きく振った。

愛咲、気付いてくれ、早く。僕が教官に止められる前に早く！

僕は手を振りながら必死で祈る。愛咲がこっちを見た。

よし今だ！僕は愛咲めがけて青く塗った小石を投げた。どうか受け取ってくれ。

奇跡だった。愛咲が確かにそれを受け止めた。びっくりした目を向ける愛咲に、

「お・ま・じ・な・い」

僕は声を出さずに大きく口を開けてそう言いながら、自分の指を差し示した。

いつか愛咲に贈った指輪の代わりのもりだった。本物のターコイズはもうどこかにいってしまったが、今はあの石に願いをこめるしかない。愛咲に伝わるように――。

頑張れ。愛咲。愛咲のためにもここで試験を台無しにするわけにはいかない。最後まで頑張ってくれ。

僕はただひたすらに祈り続けた。

数時間後。僕は門のところに立って、愛咲が出てくるのを待っていた。
きっと来るはずだ。そう僕は確信していた。何の根拠もないし、理由はわからない。でもそう信じていた。

ほら、向こうからスーツ姿の愛咲が走ってくる。いつかと同じように少し頬を蒸気させて。愛咲になんて声をかけたらいいんだろう。僕は近付いてくる愛咲を目でとらえながら考えた。ばかだな。もう何時間もこうして待っていたのに、そんなことくらい考えておけばよかった。

愛咲が僕の前に立つ。そしてゆっくり手のひらを開いて、青く塗った小石を僕に見せる。

「ありがとう」

「いや」

「これ、すごく役にたったよ」

「そう。よかった」

それだけの会話のあと、僕たちはずっと長いこと黙ったまま立っていた。

またこれから、愛咲との季節が始まるのかどうか、僕にはわからない。でももし時間が愛咲を僕の手に戻してくれたなら、僕は今度こそもう愛咲を離さない。それだけは確かなことだった。

僕の頭の中でやっと言うべき言葉が見つかった。慌てて口を開こうとしたその時、愛咲の口びるがゆっくりと動き、僕が言いたかった言葉と同じ言葉を僕に告げた。